

## ○くるめがすりの家ー旧小塩邸ー

くるめがすりの家は、新地町立福田小学校の南西、福田勤労青少年ホームの南にある建物です。

福田地区出身の建築家「遠藤 新」が、禁酒運動や国際平和協会の活動を行っていた小塩完二氏から「洗えば洗うほど良くなる『くるめがすり』のような家を作りたい」という依頼を受けて設計した建物です。昭和6年に東京都武蔵野市西久保一丁目に建てられました。

小塩氏は、この家で禁酒運動を続けていましたが、平成4年6月に94歳で逝去されました。小塩氏は最後まで、この家を大事にし、誇りにしており、その遺志を継いだ小塩氏と遠藤氏の遺族をはじめ、建築界からも保存運動が起こったことから、新地町が保存事業を行うことに決定し、町の文化遺産として、遠藤新の郷里の母校である福田小学校の傍らに復元建設を行いました。

くるめがすり（久留米緋）とは、あらかじめ藍と白に染め分けた糸（かすり糸）を用いた九州、久留米地方に伝わる染織物です。

## ○旧小塩邸 木造平屋建て瓦葺 85.95平方メートル

昭和6年 東京都武蔵野市に建設

平成6年3月 新地町福田地区に移築

小塩氏は、その手記のなかで、くるめがすりの家の事を次のように述べています。

その特色として、

- 一、無駄が無い、廊下もない、しかもどの部屋への連絡にも都合がよい。26坪という小さな家でありながら、広々とした感じ、12帖の広間があり、それに8帖、6帖の2室が結びついているので、数十人の集まりを開くことさえできる。
- 一、私室性、公共性、各室とも板戸で仕切られるので、孤立性が完全。書斎はまるで別天地。広間は居間、その他、屋根付きのテラス、コルクの間の清潔。ネズミや虫の遮断。水洗便所、換気、日当たりと風通しの良さ、などがあげられる。」

また、遠藤新の三男で、建築家の道を歩んだ遠藤陶氏は次のように述べています。

「小塩邸は、居間を中心に各部屋が展開する、部屋と部屋との関係、あるときは独立し、あるときは一体となり、全体が一つの姿にまとまる。

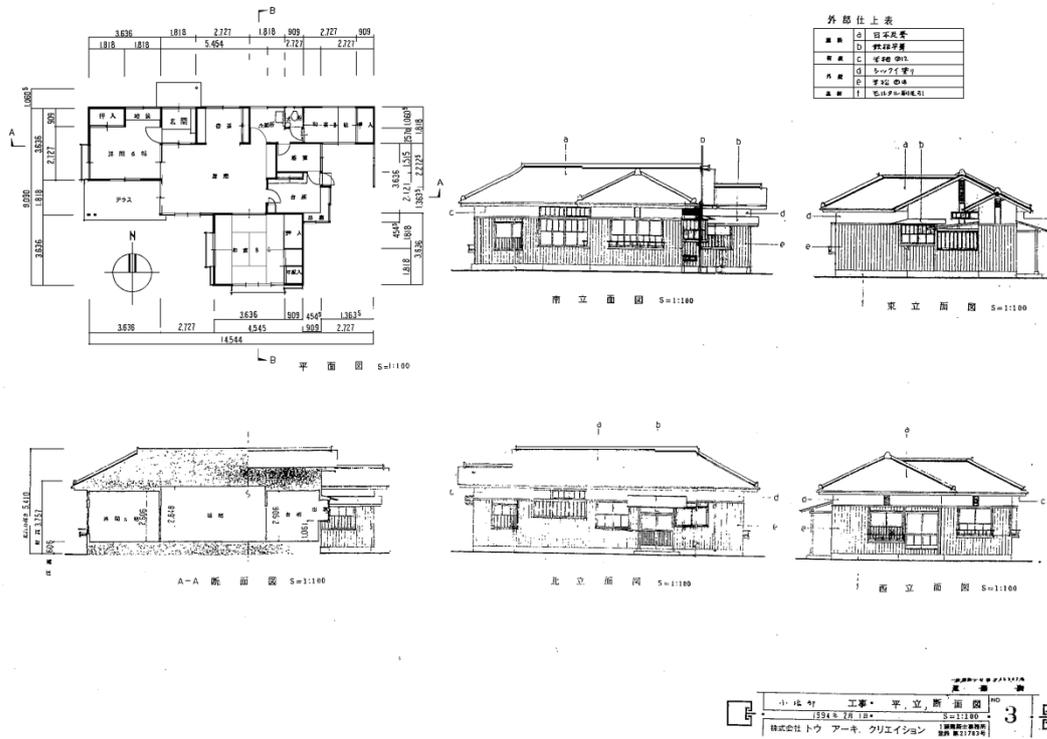
これを遠藤新は『部分が相なす美しさ、それがまた全体に参ずる美しさ、そして更に全体が部分に及ぶ美しさ、その美しさと真実』といい、それを有機的建築といった。

必要な部屋を並べて廊下でつなぐだけの住宅を極端に嫌った。

それは建築のみならず、科目同士が何の脈絡も無しに知識の切り売りに終始している教育など、明治政府が作った社会通念、文化に対する痛烈な警鐘でもあった。

この「くるめがすりの家」は、それを我々に語りかけている。」

くるめがすりの家 平面図 遠藤陶氏作図

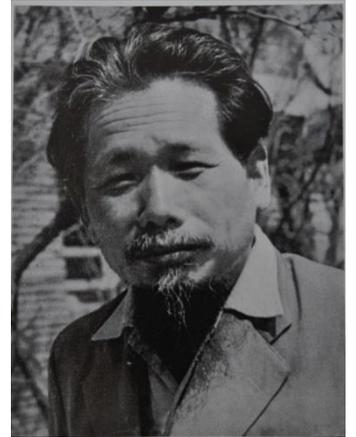


帝国ホテル設計風景

左から アントニン・レーモンド、遠藤 新、フランク・ロイド・ライト、林 愛作

○遠藤 新（えんどう あらた） 年表

- 1889年(M22) 6月1日福田村に遠藤慶蔵、かしくの次男として誕生。
- 1903年(M36) 相馬中学校（現 相馬高校）入学。
- 1908年(M41) 仙台第二高等学校入学。土井晩翠の薫陶を受ける。
- 1911年(M44) 東京帝国大学工科大学建築学科入学。
- 1914年(T 3) 帝国ホテル支配人、林愛作と知り合う。帝国大学卒業。
- 1915年(T 4) 「東京停車場と感想」を読売新聞に発表。  
明治神宮造営局に勤務。  
明治神宮宝物殿協議設計に応募、三等二席。
- 1917年(T 6) 1月8日帝国ホテル設計の為、来日したフランク・ロイド・ライトに会う。  
4月20日ライト共に渡米。
- 1919年(T 8) 帝国ホテル着工。チーフアシスタントとして建設に従事。
- 1920年(T 9) 江原都と結婚。
- 1922年(T11) 遠藤新建築創作所 設立。フランク・ロイド・ライト帰国。
- 1923年(T12) 帝国ホテルライト館開業予定日9月1日11時58分、関東大震災発生。
- 1924年(T13) 代田橋に自邸を設計、建設。
- 1931年(S 6) 長崎に自邸を設計。小塩邸（くるめがすりの家）を設計、建設。  
長春（新京）を中心に活動。
- 1945年(S20) 旧満州で終戦を迎える。
- 1946年(S21) 11月帰国。心臓病の為、東大病院に入院。
- 1948年(S23) C I E（民間情報教育局）に学校建築の理念を進言し支持をうける。  
仙台公会堂設計協議審査員。
- 1949年(S24) 文部省（現 文部科学省）学校建築企画協議員。
- 1951年(S26) 6月29日逝去。享年62歳。



○遠藤新 主な建築年表

- 1922年(T11) 自由学園校舎（東京・西池袋）ライトと共作
- 1924年(T13) 旧山邑太左衛門別邸（現・ヨドコウ迎賓館）（兵庫・芦屋）  
基本設計ライト 実施設計遠藤 国指定重要文化財(1974)  
萩原庫吉邸（東京・三宿） 国登録有形文化財(2000)
- 1927年(S 2) 自由学園講堂（東京・西池袋） 国重要文化財指定(1997)
- 1928年(S 3) 加地利夫別邸（神奈川・葉山） 国登録有形文化財(2017)
- 1929年(S 4) 自由学園初等部校舎（東京・東久留米）
- 1930年(S 5) 甲子園ホテル（兵庫県・西宮） 国登録有形文化財(2009)
- 1931年(S 6) 小塩完次邸（東京・武蔵野）  
自由学園初等部校舎増築（東京・東久留米）
- 1934年(S 9) 笹屋ホテル別荘（現・豊年虫）（長野・戸倉） 国登録有形文化財(2003)  
自由学園女子部（東京・東久留米） 東京都指定有形文化財(2022)
- 1942年(S17) 如蘭塾（佐賀・武雄） 国登録有形文化財(1999)

○遠藤 新 及び 小塩完次 関連 寄贈物



小塩完次邸 テーブル、椅子



白井喬二郎 テーブル、椅子



白井喬二郎 椅子



遠藤新製作 テーブル



目白ヶ丘教会 模型



遠藤新 書 「泥脚佩雲」



小塩氏 文机



小塩氏 ちゃぶ台



小塩氏 ラジオ

○小塩 完次（こしお かんじ）

小塩完次は、明治30年長野県飯田市に味噌醤油醸造業松岡屋の小塩万次郎、嘉寿の次男として生まれます。幼少時代に身近で酒による争いを体験し、母親からの家庭教育の基礎もあって、いち早く禁酒を決意します。

大正11年、早稲田大学に在学中に、安倍磯雄を会長として学生排酒連盟を結成し、その後、大正14年に日本禁酒同盟に入ります。同年文部省（現 文部科学省）の嘱託職員として、第20回世界アルコール問題会議（ロンドン）に日本代表として出席しています。

昭和20年国際平和協会の創設に参画し、続く昭和23年には世界連邦建設同盟の創設に参画して、自身も精力的に活動しています。

昭和54年には財団法人禁酒同盟の本部を自宅に置き、理事長に就任します。

小塩氏は、平成4年6月26日、享年94歳で逝去されるまで、60年にわたり機関紙「禁酒の日本」「禁酒新聞」の主筆を務め、他にも「禁酒読本」「酒の止め方止めさせ方」「日本禁酒運動の八十年」「世界連邦運動我等の歩み」など著書を多数残しています。また、日本全国での6000回に及ぶ講演を精力的に行っています。

○小塩 とよ子（こしお とよこ）

明治36年1月、茨城県土浦市の砂糖問屋、野村太助、はなの次女として生まれます。父である太助

はキリスト教フレンド派の草分けの一人であり、後に土浦禁酒会長を務めています。とよ子は少女時代、結核性骨髄炎の闘病生活を送りながら、父の活動に強く感化を受けています。

とよ子は、大正デモクラシーを背景として羽仁もと子によって創立された自由学園の第二回卒業生でした。守屋東らの導きにより、小塩完次氏と結婚。

禁酒運動、世界連邦運動ともに、小塩完次の強力な片腕として活動する一方、長年にわたり民生委員、児童委員を務めています。

平成3年10月16日、急性心不全にて逝去、享年は88歳でした。

守屋東…教育者。現在の大東学園高等学校の創設者。



小塩邸 和室にて



小塩邸 ベランダにて



小塩邸 庭先にて

武蔵野市内 小塩邸近隣で

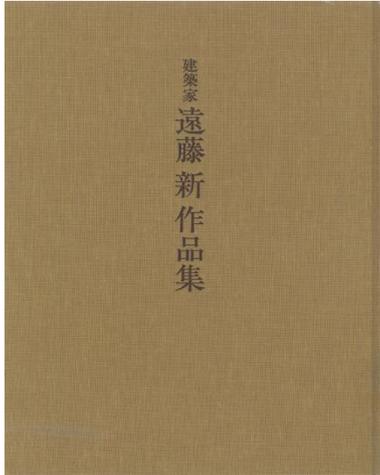


○資料のご案内

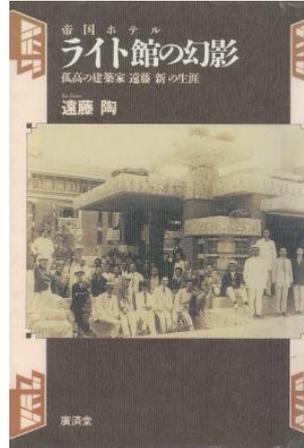
新地町図書館では遠藤 新関連の書籍所有しております。興味のある方は、是非ご利用下さい。

新地町図書館 TEL 0244-62-5031

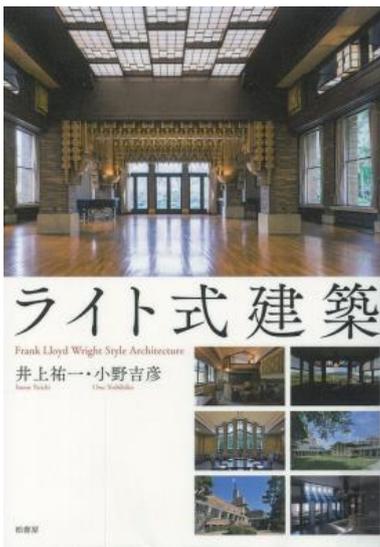
図書館HP <https://shinchi-town.jp/site/library/>



遠藤新の建築に対する理念や哲学など、当時の新聞や雑誌に寄稿していた文章と共に、実際の建築物の図面、写真など交え紹介しています。



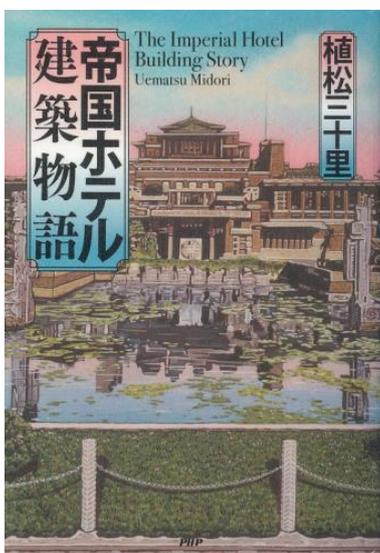
ライト館と呼ばれた帝国ホテルの新館について、実子（三男）である遠藤陶氏が、父親（新）とライトの関係性などについて書き記しています。



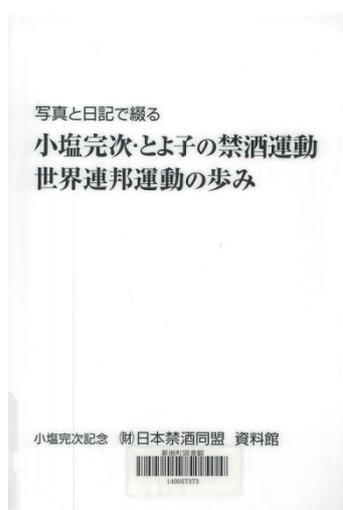
フランク・ロイド・ライトの建物とライトに影響を受けた建築家の建物を紹介しています。くるめがすりの家も掲載されています。



遠藤新の建築事務所で働いたことのある相馬出身の福原正氏の貴重な手記をご息がまとめています。遠藤の逸話が多数紹介されていて、相馬出身の芸術家佐藤玄々とのやりとりも紹介されています。



時代小説作家の植松三十里さんによる帝国ホテル建築に関わる人々の話が丁寧な時代考証のもとにつづられており、遠藤新は主要な登場人物として描かれています。



小塩完次、とよ子夫妻の活動の記録を小塩氏の残した日記と写真を元に、甥である六波羅悟氏、小塩玄也、小塩正子氏、小塩立吉らが中心となって、まとめあげられた貴重な資料です。

